



キャンパスを歩き、街を訪ねる。

旧向ヶ岡学寮跡地に木造のファカルティハウスを創る建築家に会い
根津で金物を商う農学部御用達の老舗を訪ねる。



構想中のファカルティハウスのコンセプトモデル。1階にレストラン、来賓や教員用の居室、2階にラウンジやバー、居心地の良い読書スペースなどを設ける予定だ。風通しの通路も見える。

樹の生命を活かす

向ヶ岡ファカルティハウス(仮称)2009年竣工予定

弥生キャンパスの北東、生命科学総合研究棟の裏手にひっそりと広がる旧学生寮跡地。そこにいま、海外研究者の宿泊施設や教職員のためのホスピタリティスペースを兼ねた「ファカルティハウス」を建設する計画が進んでいる。

設計を担当するのは、建築家の阪根宏彦氏だ。氏は安藤直人教授の木質材料学研究室に席を置き、工学とは一味違った農学的な建築を学び実践している。いわく、材料生産から構造・構法までを俯瞰する総合的な建築だ。

「先日、安藤先生とじっくりと和歌山を訪ねました」と阪根氏は語る。「木材の生産者の方々といろいろ話していると、

一本の樹が何代もの人の手によって大事に育てられてきたことがわかる。この経験は貴重です。伐られたあとも樹が永く生き続けるものにしなければ」

当初、ファカルティハウスは現代的なコンクリート建築のかたちで構想されていたが、弥生講堂に見られるような、農学の精神を映す木造案が浮上した。また、近隣住民の要望や意見も大きい。

コンセプトについて尋ねると、「この施設はできるだけ近隣の家屋から離し、景観を損なわない

よう、高さも通常の二階建てほどに抑えたい。また、風通しのため馬道と呼ばれる大きな通路も設けるつもりです」という答えが返ってきた。

さらに続けて、阪根氏は「設計ビジョンをその理論の切れ味のみで提示するのではなく、いま、この場所に何が求められているのか、じっと耳を澄まし、さりげなく心をくばる。その上で樹の生命と環境を活かすものにしたい」と話す。

すばらしい機会に心が躍る一方で、そのプレッシャーは大きい。建築物は、誰でも見ればわかる。曖昧な評価が成立しないところで、結果を出さなければならない。設計作業は常に身が引き締まるという。

「百年もてば重要文化財、二百年もてば国宝」と安藤教授が冷やかすと、静かに微笑む阪根氏。全ての歴史的な建築家と同じように、志は高いに違いない。



設計を手掛ける阪根宏彦氏。九州大学建築学科卒業後、建築家香山壽夫に師事。同事務所で多くの経験を積み、現在は木質材料学研究室の博士課程に席を置く。



春先には若葉がそよぐ旧向ヶ岡学寮跡地。近隣住民に十分な配慮を払いながら、この環境を最大に活かす居心地の良いファカルティハウスを構想中という。

